

小 スリヤ是程に申ても御身の誠を明かさねぬとナ。

政 眞實ありもせぬ事を。なんでお受けがなり升う。

小 御身の兄を隔つるナ。

政 なんであなたを隔て升う、

小 そんなら誠を明かして呉れるカ。

政 夫ぢやと云ふてあい事ゆゑ。

小 スリヤ飽迄我を隔つるのぢやナ。

政 なんの妾ガ。

小 イ、ヤ。さふぢやモウよい。肉身分けし兄が頼みをよ

そに。斯程まで隔つるから。此方よも又計らふべき所存あり。

然らバ。

トツイト立上る。

政 ア、もしあなたの何れへ。

小 何れへ往かうと心次第。必らず共にかまひれナ。

政 ア、もし夫で。

小 然らバ明かして聞かざるカ。

政 夫ぢやと云ふて。

小 立歸らうカ。

政 サア夫。

小 コレ政子の前。御身のつれないものぢやぞヤ。

ト下み居てきつと云ふ。政子とつと思入。此時上手の遣
戸口より。右兵衛佐頼朝。惣髮鬘。前茶筌。狩衣好の拵へに
て出づる。跡より。北條四郎時政。烏帽子。直垂。附太刀。更け
たる拵へにて出で來たり。宜しく立身にて。

是まで色も出さゞりし。此度心を決せしより。文覺竊も都へ上り。法皇の院宣を乞ひ受け來たらん。堅く約して別れしより。彼が便を待ちつるに。噂も聞け。文覺も。何か其身も罪を得て。流罪の身となり。昨日當國へ來たりし由。虚實の程を糺さんと。先刻安達藤九郎を網代の濱迄遣ひしたり。此事調ふ夫迄。容易も事の發し難し。必ぞ人よ沙汰致され。小文覺流罪の趣。人の噂も聞き及びし。如何なる罪を犯せしか。

時 順て安達藤九郎が歸り來たらば其事の虚實の儘も分る。で有らう。

頼 凡人ならぬ沙門文覺。順て様子を知るゝ。で有らん。上「語り慰む其折柄。立歸る藤九郎。」

ト山下しよて向ふより。ハッくよて。以前の藤九郎走り出で。直よ本舞臺へ來り。二重の下手よ宜しく手をつま。

藤 ハッ。只今立歸升てムり升る。
時 早かりし藤九郎。我が君もお待兼ね。シテ文覺が實否相
知れし。カ。

藤 ハ、如何も網代の濱。お尋ねし處。人の噂も違ひなく。昨日彼の濱へ着船なし。名古屋が奥の名古屋寺も。居を占めたる由承り。早速彼の寺も到り面會せし。事首尾よく調ひし趣にて。直様參上致すとの事。此事申上ん爲め。一足先へ立歸り升てムり升る。
頼 オ、太儀で有た。文覺是へ參るとあれ。都の様子も相知れん。

上「待間程まちまぢさく向むかふの方かたより。法衣ほふえを改あらため文覺上人ぶんかくじやうにん。天下てんかの安やす危あやを身み一つひとに。擔たかぶ心こころの大膽だいだん不敵ふてき。悠々ゆうゆうとして入り來きたる。

トヤハリ山下やまのしたしまて。向むかふより以前いぜんの文覺ぶんかく。美うつくしき墨染すみぞめの衣ころも。好このの袈裟けさを掛かけ。草履くさりにて悠々ゆうゆうと出で來きたり。此こゝ淨瑠璃じやうるり一ひとばいに本舞臺ほんぶたいへ來きたり。下手したての方かたへ宜よろしく立たち身み。

頼たの待兼まちかねし文覺御坊ぶんかくごぼう。約やくを違ちがへせ今日こんにち只ただ今いま。よく予よ入來いらい致いたされしナ。

時とき何なにの兎うさぎもわれ御坊ごぼうより。まづくわれへ通とほられヨ。文覺ぶんかく然しからば罷まがり通とほるでふらう。

上「一禮いちらいなして文覺ぶんかくの。上座かみざへこそい押直おしまる。

ト文覺ぶんかく二重にじゆうへ上ある。頼朝たのちゆう席せきを讓ゆづる。文覺ぶんかく上座かみざお至いたつて宜よろ

しくすまふ。皆みなを順じゆんに宜よろしく居ゐなふび。

時とき文覺御坊ぶんかくごぼうに。遠路とんろのお勞あつれ。嘸まかして推察すいさつ致いたす。何なにのまかれ御坊ごぼうに。なんらの罪つみよて流罪りゆうざいの身みといなられしヤ。

頼たのまた院いんの御所ごしょの御氣色ごきしきと。如何いかこれあり候まうや。是こゝは居ゐならふ者もの共ともに。遠慮とんりよのものに候まうねば。是こゝにて申聞まうもんかされヨ。

上「尋ねに文覺ぶんかく打うちゝるみ。

文ぶん先まづづと佐殿さだんも御健勝ごけんしょうにて。此上こゝの儀ぎの候まうす……山僧さんそう高たか雄ゆう山さん神護じんご寺じを造營ぞうえいあさん立願りつがんあれば。其勸進ごんじんに事ことを寄よせ。法ほふ

皇みかどの御所ごしょへ入込いりこみと。能よと不法ふぽうの舉動きゆうどうをなし。身みは罪つみを得えて縛ばせられ。遂つひに宮内みやうちの判官はんくわん兵衛尉ひやうゑい公朝こうてうも近ちかづき。是こゝに付つて密々ひそひそに院いん宣のたまひの儀ぎを申入まういりたる處ところ。兼かて御所ごしょにも清盛せいせいが猛威もうゐの爲ためめに狹せまめられ。御心ごこころ愛あいく思召おぼしめさるゝの折柄せがら。左ひだり右みぎなく院いん宣のたまひ下くだし。玉たまなる御ご

氣色なりと。此事よくく申堅め。我を當國へ流罪となせしも。此儀を佐殿と達せん爲め。即ち公朝が計らひなれば。今の憚る處なし。早々事を計らひ玉へ。

上「云ふは頼朝不審を立て。

頼朝が有様にては。容易も事を爲し難きに。況してその御氣色ありと申せども。誰にそれを賜らねば。諸人の歸服覺束あし。何等の故も院宣を乞ひ受けては玉とらざりし。

文 かのく御約を申たれば。院宣の儀は山僧が方寸に有て疑ひあし。然れどもこゝに一儀あり。そも山僧當國へ流罪となりしも。まつと佐殿の御爲は上洛なして。院宣を乞ひ受くるの事と至るも。是また御邊の力を以て。高雄山神護寺を造立なさ

之

御邊の力を以て。高雄山神護寺を造立なさ

ん立願の其爲なり。定めし安達盛長殿より。御承知の之れあらん。然れば院宣を急ぎ玉ふならば。高雄山神護寺へ莊園の寄進致され。

頼 其儀の兼て盛長より承つて承知致す。去りながら我が身世に出づる其上より。如何様ども爲すべきなれど。斯る流人の身の上にて。いかで其事のなるべきや。

文 仰せ一應尤も似たれど。山僧が申處も。後日日本六十餘州御手に入れし上の事。只夫迄のまゐるしの狀。此文覺が望みの莊園。後日寄進あるべき旨。御直筆の玉りたし。

上「詞は頼朝打案じ。

頼 如何も認め参らすべし……料紙を持って。

藤ハツ。

ト藤九郎料紙硯を持ち出で。頼朝のそばへ差置く。頼朝
筆を取て。

花
園

頼シテ御坊が望みの莊園の。
文丹波の國の新庄、本庄、雀取、打繩、播磨の國五ヶの庄。土
佐の國より高鴨の郷。其外四ヶ所の莊園こそ。文覺が望む處な
れ。

頼如何にも承知致したり。

上「硯引寄せさらく」と。寄進の狀を書終り。

ト頼朝書終りて。

イザ受取られヨ。

上「差出せば文覺とつくと讀み終り。思ひを莞爾と打笑きて。



ア
空

文 ハ、扱もく御邊の心の廣きお人かな。未だ御手入ら
ざる内より。我が物顔いよとくも。十三ヶ所を寄せ玉へり。此
廣量よての一定して。天下の主となり玉ん事。何疑ひのある
べきや。今の何をか包み申さん。法皇より下し玉る院宣。文覺
是よ持参せり。イザ拜見あられヨ。
上「懐中より恭々しく。錦の袋よ納めたる。院宣を取出だせバ。
頼 アイヤ暫くお待ち下され。

ト藤九郎又向ひ。
手水を持って。

ト奥へ這入る。政子又向つて。
梶 烏帽子を持って。

政 ハ、ア。

ト奥へ這入り。奥より藤九郎。蒔繪の盥湯桶など持出る。頼朝嗽ひ手水とする事ある。奥より政子立烏帽子を持出る。頼朝烏帽子を着て元の所より来り。宜しく平伏する。

上「禮を正して頼朝は謹んで扣ふを。文覺威儀を改めて。

文 法皇より前の右兵衛佐へ下し玉はる院宣。有難く頂戴あ

れ。上「渡せば取て押戴き。袋の紐をとくく。と。繰廣げて讀む其

文体。

頼 平家追討院宣の事。

早く清盛法師並び一類を追討すべき事。

右君も直あらざる人は。民をして愛を爲さしむ。姦臣朝もあれを賢者進まず。彼の類へ。只だ朝家を忽緒するのみあらず。神意と佛法とを失ふ。既又神佛の怨敵たり。又王法の朝敵たり。依て前の右兵衛權佐源頼朝朝臣も仰せて。宜しく彼の輩を追討せしめ。早く怨敵を退け。宸襟を安んじ奉るべし。院宣もよつて執達件の如し。

治承四年七月五日

散位光能奉る

謹上 前右兵衛權佐殿

上「讀み終れば。時政、政子其外のみ居る人々顔見合せ。悦び勇む。道理ある。頼朝院宣を卷き納め。

ハ、法皇より下し賜はる院宣。有難く受納仕る。

上「押戴して懷中なす。文覺重ねて。

ト文覺頼朝の寄進狀を懷中して。

斯く事の調ふ上り。最早猶豫は成り難し。万平家も洩れ聞え。討手を下すに至りあば。由々しき大事も及ぶべし。早々事を發せられヨ。

頼 如何も御坊の言はるゝ如く。最早猶豫致す處もあらず。如何も時政。

ト鳴物入り詔への合方。

斯く院宣を玉はるといへど。味方と頼む將士なければ。事を發するも如何せん。味方の人數を招くも付ては。先づ差當り身近きは。伊藤入道祐親なれど。我其以前彼が娘の長姫と窃も語らひ一子を設く。然るも入道是を怒り。情あくも我が小兒を。白瀧の底もふしづけとあし。剩我をも共も失はんとす。祐清の情も

よつて。伊藤が館を逃れ出で。汝時政も養はれ。是ある政子を妻となし。今此伊豆山も起臥なす。我も於て因われど。如何せん彼れ平家も阿り。我を以て仇と爲す。又我が方も恨われ。味方となるべきものもあらず。先づ差當り頼朝が。味方も招くものどもはたれ。藤九郎汝が所存は如何なるや。藤ハ、夫こそ心易き事。東八ヶ國の大小名。過半は源氏の姓。よして。君の御家人ならぬはなし。平家の威勢盛んなれば。暫く從ふのよもして。君思召たせ玉。誰り參上致さいらん。就中伊藤左衛門尉忠清は。方今上總の國の八郎廣常と不和よし。平家も恨を懷く折なれば。院宣を以て召れなば。必らず御味方も參るべし。まつた千葉之介經胤。三浦之助義明は。其性義有て悖らず。何ぞ眞舊の主も背き。違勅の賊も與すべきや。また土

肥の實平。土屋の三郎。岡崎四郎の輩など。元來仕へ奉るものどもなり。今經胤。義明等御味方に參る上は。東八ヶ國の者共誰う一人拔んで。御味方に參らざるものあらんや。

時 然ある時には北國。西國。招うせして參るべし。

小 御心易く思召されヨ。

文 シテ 近國大小名の其内に。君も背くべき者共。誰々なりと思はるゝや……北條殿の御意見ハナ

時 今近國の將士等を願るに。相模國の住人大庭の三郎景親

ハ。三代相恩の御家人なれど。當時平家重恩のものにて。其勢國

内にはびこれり。まつた武藏國の住人。島山重能。小山田有重等。

平家の大番勤め居れば。重能が男重忠。有重が男重成。必定背き

奉るべし。差當つたる敵と見るハ。是等のものにて候なり。

頼 ホ、ウ其詞頼朝が思ふ處に少しも違ハズ……如何に盛

長斯くと軍勢を催す上は。忽ち平家の知る處となり。討手を向

くるは是れ必定。敵の寄せざる其先に。頼朝軍の手始なし。吾が

運命を試みんと思ふなり。汝が所存如何なるヤ。

藤 夫、仰の如く先んずる時は人を制そと。先づ差當り八牧

なる。和泉の判官兼隆を打亡し。普く諸國の將士等に。源氏の武

威を示し玉ふ事然るべし。と存じ奉る。

頼 尤も。我も同意なり。シテ八牧判官を討取る軍の手筈は如

何に。

藤 先づ盛長が存するまは。御手始の軍にして。小勢を以ての

戦ひなれば。夜討を爲すこそ然るべけれ。味方の人數大凡ハ……

……八十餘騎は至るべし。北條殿を大將として。大手搦手。二手

に分れ。

上「賊をつくつて押寄せなば俄の事。城兵共。物の具付くるひまもなく。右往左往。散亂なそを。透もあらせず追立て難立て。

當るを幸ひ切立てなば。必定勝利疑ひなし。

小 其時我は父諸共。大手の方。射手を揃へ。

上「あわてふためく城兵共を。無二無三。射て落し。味方一度。亂れ入り。

終に大將兼隆が首提げて立歸らん。御心安く思召せ。

頼 ホ、ウ勇まし。然ある上。は諸國の源氏。追ひく

味方。走せ至らん。其時こそ。頼朝が先陣。後陣の人数を定め。

石橋山。旗上げなし。日ならず都へ攻め上らん。

上「勇みたつたる主従が。智略。文覺。感入り。

文 ホ、ウ天晴。鏡。御手配り。一々。以て感伏せり。昔し。音の文侯。勃丁の詞を以て。九夷を驚うし。齊の桓公。管仲の謀を用ひて

天下を正せり。今。佐殿の。大器を以て。加ふる。北條氏。安達氏の。智略あり。謀を。戰場の中。廻らし。勝つ事。島夷の外。決し。玉

の。天下終。平定して。海内。一統なさん事。鏡に懸けて見るが。如し。是に上。こそ。悦びや候べき。

頼 是と申すも。文覺御坊の心。を盡せし。御賜。

政 此に。再。源家の。御運。今。開くる時。到り。

頼 頼て。源氏の代。となさば。神護寺の儀。は。文覺御坊の心。の。儘

よ。造營致さん。

文 夫。よ。て。山僧の。所願。も。満足。先づ。夫迄。は。萬事。よ。つけ。ゆめゆ

め油断あるべからず。院宣お渡し申上り。軍事も用き沙門の
身の上。最早お暇申すべし。

頼 斯リヤ御坊より。

時小藤御歸院とナ。

文 猶も御勝利これあるやう。佛お祈致すでもらう。

頼 何分よしなにお頼み申す……見よく入道清盛始め。當

の敵の平家の一類。今より思ひ知らせ呉れん。

文 方々然らば。

皆々おさらば。

上「さらばと計り立上る。跡お見送る頼朝公。驕る平家を忽ち

よ。源氏の御代と翻へし。鎌倉山の星月夜と仰がれ玉ふ御

榮え。其源は是れ予此文覺法師がいさはしと。其名を世々

あ。

ト文覺立上り。皆々勇み立ち。此模様雙方ひつをり宜し
く賑かなる詠への鳴物

三重あて

幕。

文覺上人勸進帳終

版權登錄

明治廿一年九月廿四日印刷
同 年同月廿七日出版

(勘進帳)

定價金四十五錢

東京日本橋區本町三丁目拾七番地

發行者

原 亮 三 郎

印刷者

同 同

關 幸 吉

大賣捌

大坂北久寶寺町四丁目拾二番地

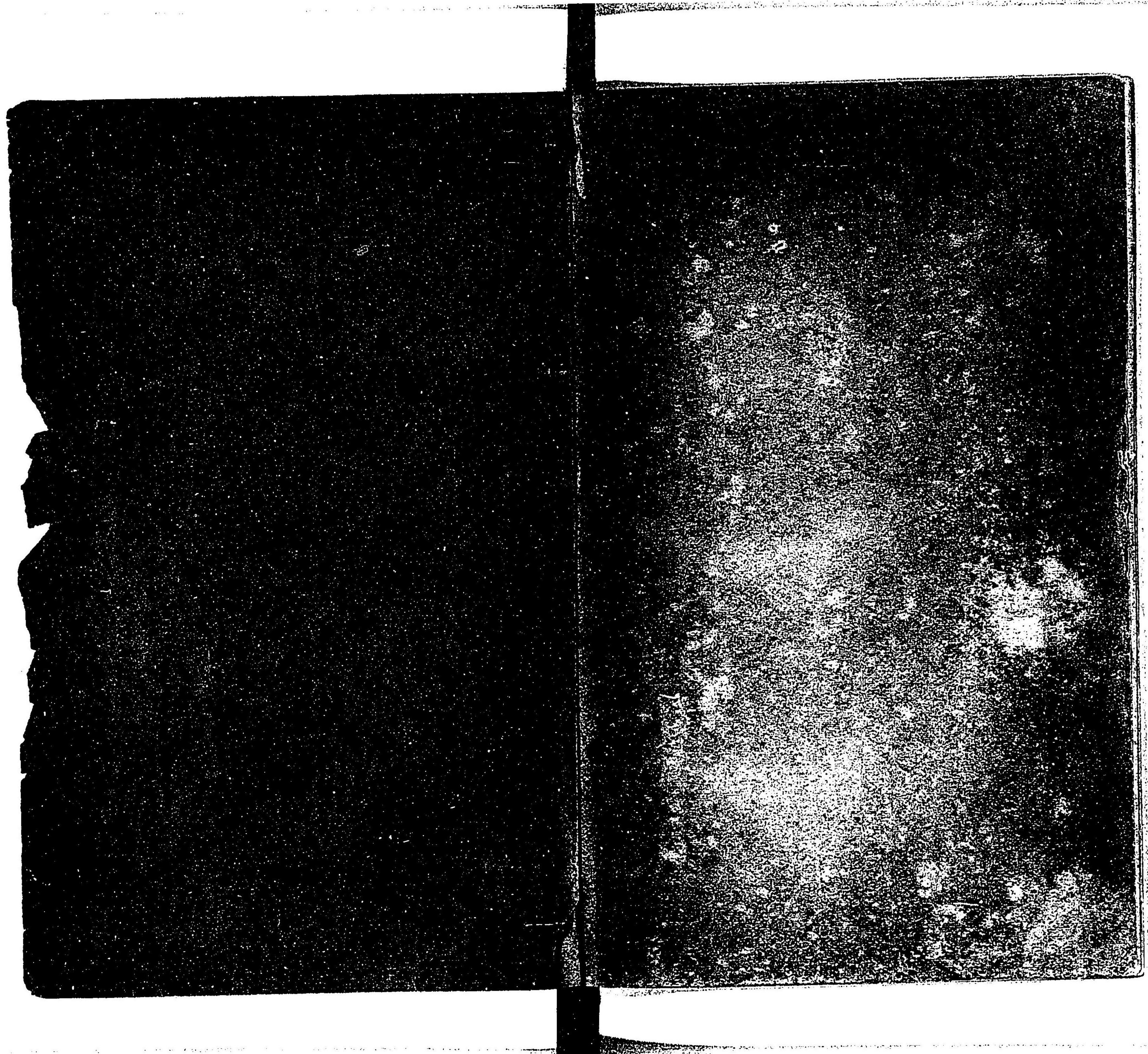
金港堂 原亮三郎支居

賣捌所

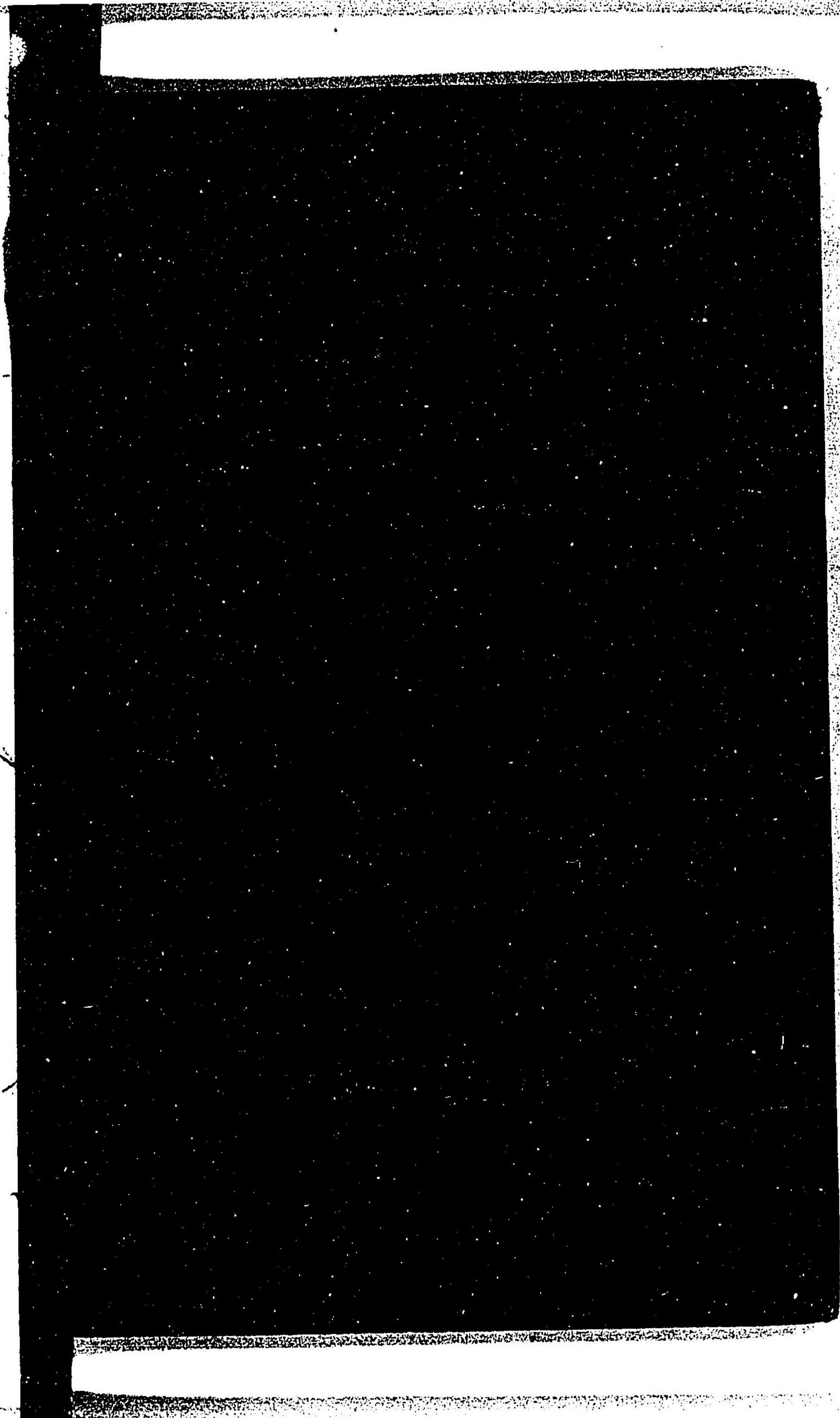
仙台

金 港 堂 支 店

各府縣下代理大賣捌所



107
53



17
53

088925-000-7

17-53

文覚上人勸進帳

依田 学海

河尻 宝岑 / 著

M21

DBK-0109

